信州大学
SHINSHU UNIVERSITY

信州大学における オープンアクセスの歩みと オープンサイエンスに向けて

2019年12月10日

信州大学附属図書館情報システムグループ
岩井雅史

信州大学学術情報オンラインシステム「SOAR」

■機関リポジトリ　SOAR-IR

- □本学研究者の論文などを、インターネットで無料公開
- □著者情報から、SOAR-RDの本人ページへリンク

■研究者総覧　SOAR-RD

- □本学研究者の業績・経歴などを掲載
- □業績から、電子ジャーナルやSOAR-IRの本文へリンク

特徴：データ連携

（右下図出典：NIIオープンフォーラム2019「図書館の強みを活かす次期JAIRO CloudとCiNii Researchイントロダクション」発表資料）

SOAR-IRの現状

■コンテンツ数：18,510件　（2019.03.31）

□WoS採録論文（2014～2018年分）の捕捉率　13.5%※

※ ArticleおよびReviewのうち、reprint authorが信大所属であるものをDOIにより突合

■収録対象：研究成果全般

□論文PDF　がほとんどだが、

□データのExcelファイル

□音声データ　もある。

音声データの事例

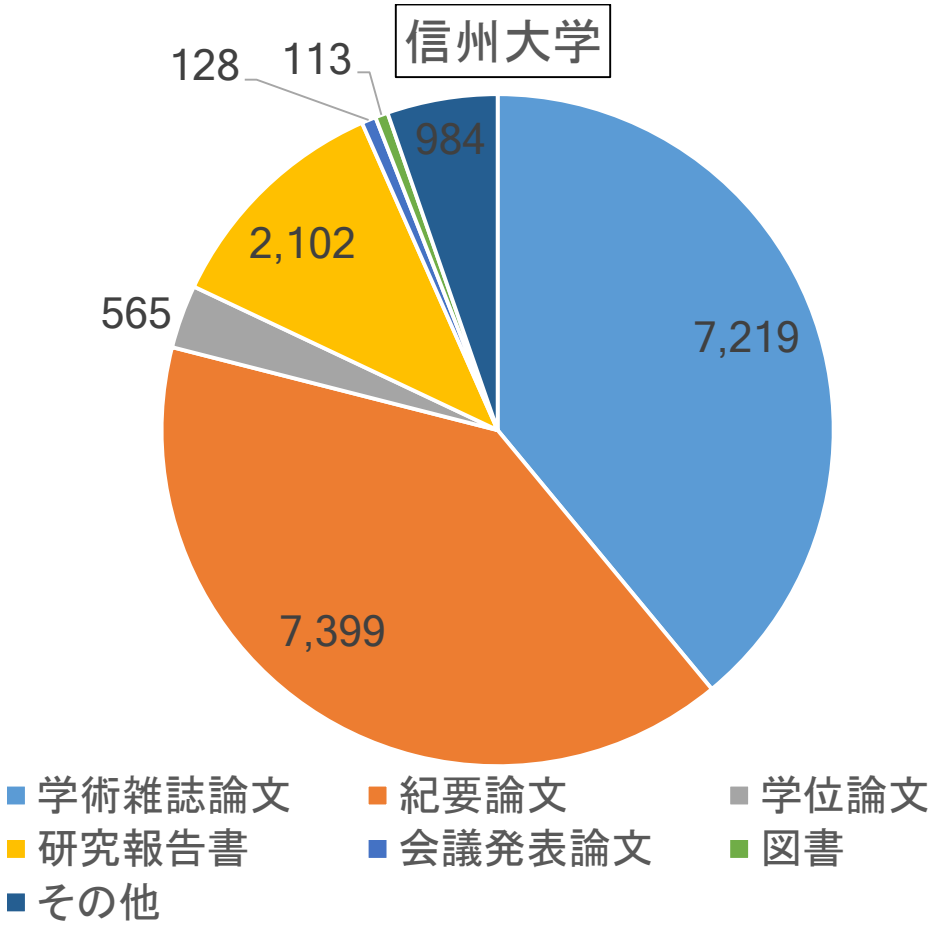
大阪摂津方言若年層談話文字化資料

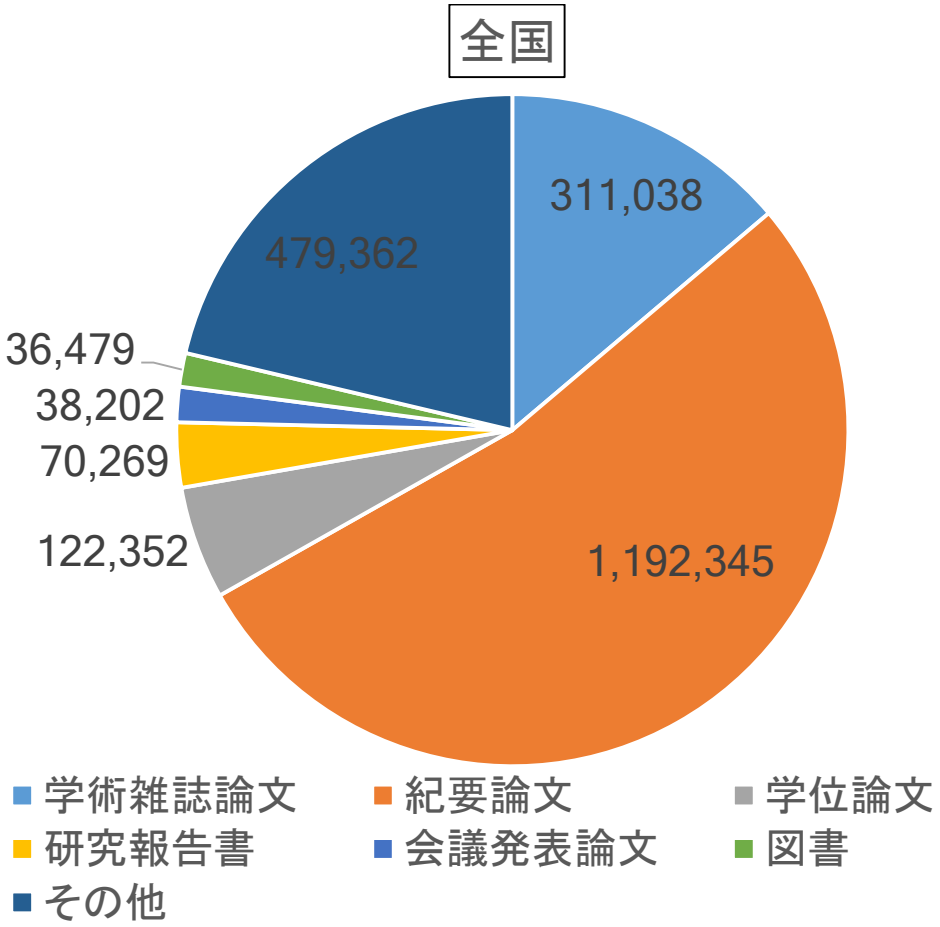
File / Name
大阪摂津方言若年層談話文字化資料.pdf
大阪摂津方言若年層談話文字化資料.pdf (1.08MB) [2 downloads]
話者ペア１：インタビュー談話（収録時間4分48秒）.mp3
話者ペア１：インタビュー談話（収録時間4分48秒）.mp3 (4.64MB) [2 downloads]

言語学の研究報告書。
冊子で出版された際には、音声データが収録されたCD-ROMが添付されていた。

https://hdl.handle.net/10091/00021763

収録コンテンツ内訳





（出典：IRDB　2019年3月31日現在、本文ありのみ）

最近の取り組み
①科研費研究成果の公開の推進

■2014　JSPS　:科研費の研究成果のOA化推奨開始

■2014　信　大　:科研費成果報告書のSOAR-IR登録を開始

報告書に掲載された成果論文についても、機関リポジトリ登録に関するご案内を研究代表者にメール送付

⇒ 成果報告書　:605件（2014-2018提出分合計）
成果論文※　:444件（2014-2018提出の成果報告書記載分合計）
※ご案内前に登録されたものは含まない

最近の取り組み
①科研費研究成果の公開の推進

■コンテンツ数の充実

■機関リポジトリの周知

→　関連論文以外の登録の依頼につながる

最近の取り組み
②博士論文のインターネット公表手引きの見直し

■2013　学位規則改正で博士論文のインターネット公表義務化

----------6年経過----------

- 博士論文を構成する雑誌掲載論文の著作権処理が難航
- 公表可能な博士論文の未提出・事務処理の遅延

■2019　インターネット公表に関する手引きを見直し

- 学務課大学院室を中心に、附属図書館も加わって新しい手引きを作成
  2020年3月授与分より適用

今後の課題　①研究データの扱い

■保存

□信州大学における研究データの保存等に関するガイドライン（平成30年3月20日研究担当理事裁定）

- 資料10年、試料5年
- 研究者の責務……管理・保存、必要に応じた開示
- 部局長の責務……教育・指導、環境整備、定期的点検

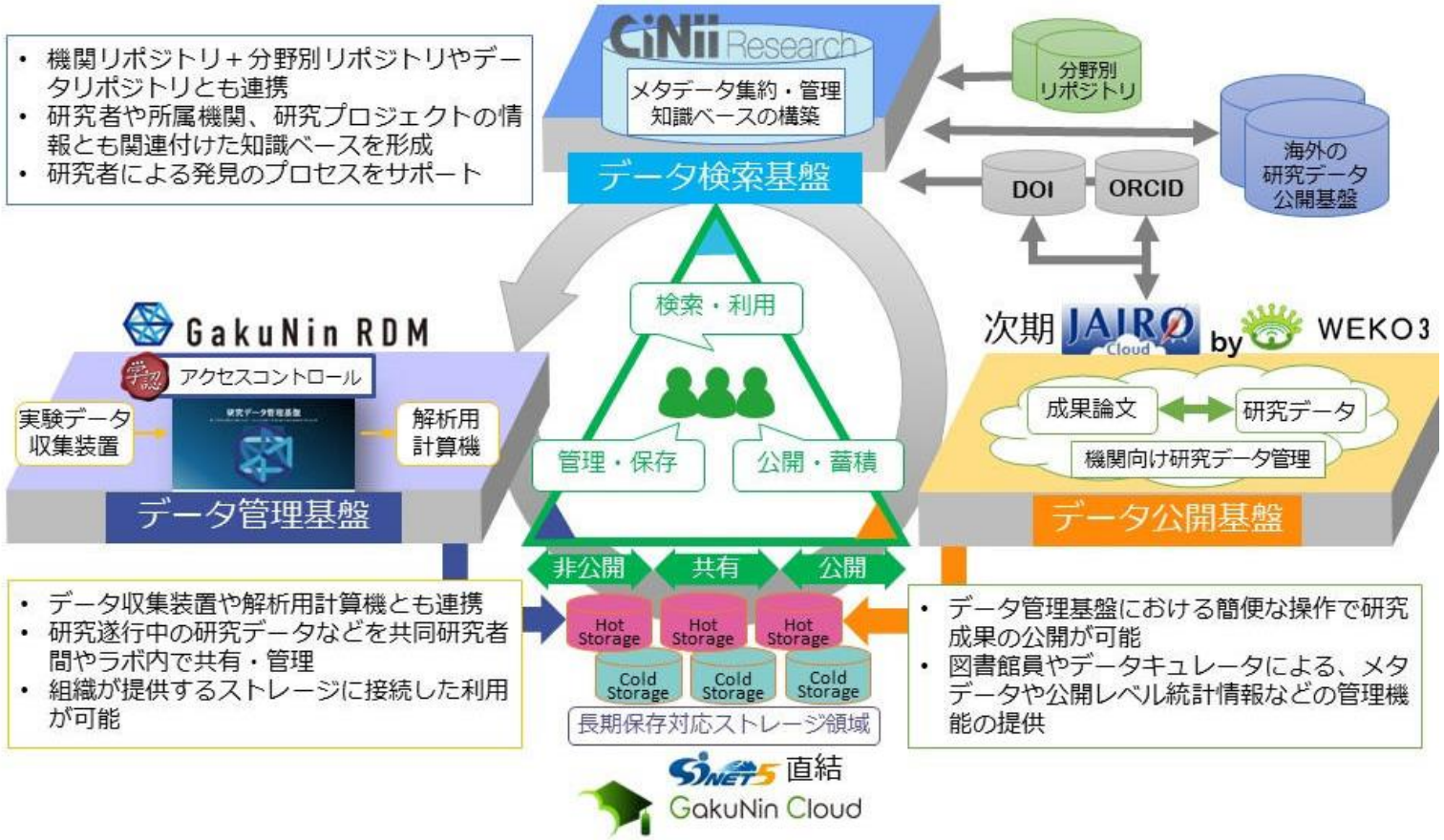
} 具体的にどう？

■公開

□特に規定なし

NII研究データ基盤と信大の活用計画

- 不正行為防止計画推進室会議において、“GakuNin RDMを用いた研究データの保存を視野に検討を行う”ことで大筋合意
- 総合情報センターにおいてストレージを確保予定



- 機関リポジトリから継続して附属図書館が担当

国立情報学研究所　オープンサイエンス基盤研究センター https://rcos.nii.ac.jp/service/ より（2019-11-26閲覧）

学内の組織体制

JPCOAR 研究データタスクフォース(2018)「研究データ管理サービスの設計と実践」第2章：サービス設計　より

今後の課題　②オープンサイエンス方針

- 日本国内で25の大学・研究機関がOA方針を策定
（2019.11.11　JPCOARサイトによる
https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/index.php?page_id=53）
- 信州大学では未制定
→附属図書館の年度計画に検討を明記
- どのように進めるべきか？どんな内容にすべきか？
  - 参考：オープンアクセス方針策定ガイド(JPCOAR)
    http://id.nii.ac.jp/1458/00000021/

ポリシーの意義

- 学術研究を担う一員として、オープンサイエンスにコミットするという意思の表明
- 継続・安定してオープンサイエンスに取り組んでいくための指針
- 研究者に対して説明するための根拠

ただし、グリーンOA捕捉率向上にはあまり寄与しないとの調査も……
（第21回図書館総合展　JPCOAR主催フォーラムでの、国立情報学研究所オープンサイエンス基盤センター　河合将志特任研究員の発表）

信大教員のOAへの意識

- 「電子ジャーナル等学術情報流通に関するアンケート」より抜粋
  - 回答期間　2018年12月～2019年3月
  - 回答数　471　（回答率45.5%）
- 論文のOA化についての意見
  - APCによるゴールドOA　33%（著者負担6%、機関負担27%）
  - リポジトリによるグリーンOA　23%
  - J-STAGEなど学会や国の主導　37%
- 過去5年間のAPC支払い経験
  - あり　27%
- 機関リポジトリでの公開経験
  - 自主的に　30%　　依頼があれば（紀要も含む）　52%

オープンサイエンス推進部会

- 学術情報・図書館委員会の下に設置
  - メンバーは各部局の同委員またはその他の教員＋各館の図書館職員
  - 2019年9月に第1回部会で活動内容等を決定
- 主な活動計画
  - 研修や講演会による啓発
  - 研究者へのインタビューやアンケート
  - オープンアクセス・オープンサイエンス方針の検討

インタビュー項目（検討中）

- 現在の研究テーマ・研究の一連の流れ
- 研究で扱うデータの種類
- データの保存の仕方
- データの共有の仕方
- データの公開経験の有無、希望、懸念点
- 公開データの利用経験
- データに関して希望する支援
- オープンサイエンスに対する意識

研究者へのアプローチの事例

■紀要（PDF公開）に観測データを毎年掲載している……
→生データを公開することもできるのでは？

■実際に聞いてみると……
- 他のデータとの較正などの処理を行ったうえで出しているので、生データは公開はしたくない（他の研究者から研究上の必要で求められれば別）
- 他にも公開されているデータが充実してきており、これ以上詳細なデータは需要はないのでは

活動の念頭に置くこと

- 研究者の利益になること
- 研究者の負担にならないこと
- 研究者の理解を得ること

上から言われたから仕方なく……ではなく、
より研究の役に立つ方法を考える